

ラストキング・オブ・スコットランド

2007(平成19)年1月30日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝ケヴィン・マクドナルド／原作＝ジャイルズ・フォーデン『スコットランドの黒い王様』(新潮社刊)／出演＝フォレスト・ウィテカー／ジェームズ・マカヴォイ／ケリー・ワシントン／サイモン・マクバーニー／ジリアン・アンダーソン (20世紀フォックス映画配給／2006年アメリカ映画／125分)

第2章

面白くするために

……タイトルからは何の映画かさっぱりわからないが、これはアフリカのウガンダにおけるアミン大統領という独裁者の内と外の姿を、大統領の主治医となった若きスコットランド人医師の目から描いた超話題作。アミン大統領を演ずる黒人俳優フォレスト・ウィテカーは、主演男優賞を総ナメにしており、2月25日のアカデミー賞でも受賞はほぼ確実……？ ちなみに地図で見ると、ルワンダとウガンダはほぼ隣同士だが、『ルワンダの涙』で観た「ルワンダ虐殺事件」に続いて、ウガンダのアミン大統領の光と影についても、年表を片手にしっかり勉強しなければ……。

超話題作だが、実は知らないことだらけ……

この映画は1月24日に20世紀フォックスの担当者からメールされてきた試写の案内を見るまで、何の映画か全然わからなかったが、①先日発表となったゴールデングローブ賞最優秀主演男優賞受賞！ ②昨日発表の第79回アカデミー賞主演男優賞ノミネート！ ③各映画祭で主演男優賞を総なめの話作、という触れ込みを読んで、これは絶対観なければと思ったもの……。

ちなみに、11月1日に観た『リトル・ミス・サンシャイン』(06年)も全く事前知識のないまま、第19回東京国際映画祭コンペ部門最優秀監督賞、最優秀主演女優賞、観客賞の3部門受賞というニュースを見て観に行ったが、やはりいいものはいいようで、アカデミー賞でも『リトル・ミス・サンシャイン』は作品賞、

助演男優賞、助演女優賞等にノミネートされている。

この『リトル・ミス・サンシャイン』の時と同様、『ラストキング・オブ・スコットランド』についても、そのテーマやストーリーについては何も知らず、また監督や出演者についても何も知らないまま観に行ったが、上記①、②、③の触れ込みに違わぬ出来に感心。圧倒的迫力の中で、2時間5分がアツと言う間に過ぎていくことまちがいなし！

ルワンダは……？ ウガンダは……？

1月19日に観た『ルワンダの涙』（06年）は、100日間で100万人が殺害されたという1994年の「ルワンダ虐殺事件」がテーマだったが、うかつなことに私は、この『ラストキング・オブ・スコットランド』の舞台がアフリカのウガンダだと聞き、てっきり『ルワンダの涙』と同じ国だと錯覚していた。多くの日本人は、アフリカの国の名前や位置またその問題点についてほとんど何も知らないから、私と同じように錯覚した人もいるのでは……？

ちなみに、ルワンダはアフリカ大陸のほぼ中央に位置する小さな国だが、ウガンダはそのすぐ北東にある、面積的にはルワンダの6～7倍（？）の国……。プレスシートによれば、ルワンダは1899年にドイツの保護領とされたが、1916年からはベルギーが占領していたとのこと。これに対し、ウガンダはイギリスの支配下に置かれていた国。そして、この映画で主演男優賞を総なめにしようとしているフォレスト・ウィテカー演ずるイディ・アミンは、1971年のミルトン・オボテ大統領に対するクーデターに成功し、国民の圧倒的支持を受けて大統領に就任した人物。

この映画は、そんなアミンとひょんなことからその主治医となったスコットランド人医師ニコラス・ギャリガン（ジェームズ・マカヴォイ）との不思議なめぐり会いから始まる壮大なドラマを描いたもの。

このように、まず『ルワンダの涙』は1994年の物語であるのに対し、『ラストキング・オブ・スコットランド』は1971年の物語で、約20年の差異があることをしっかりと認識しておこう。

原作は……？

この映画の原作は、1998年に発表されたジャイルズ・フォーデンの『スコットランドの黒い王様』。ネット情報によると、フォーデンはこの本によってスコットランド人医師ニコラスの立場から、アミン政権下にあるウガンダの恐怖の世界を案内しようとしたが、「独裁者を単なる怪物として描くのは簡単なことだが、著者は予想を裏切り、恐怖政治の最中のアミンでさえ、魅力的な人物として描いている」らしい。

またプレスシートによれば、5歳の時にイギリスからアフリカに移住し、しばらくウガンダで暮らした経験を持つフォーデンは、フィクションとしてニコラスという人物を創造することによって、アミンという独裁者の内面世界を描写することに成功したとのこと。

このように、アミン政権下で現実には展開されたショッキングな出来事とフィクションとしてのニコラスの行動をミックスさせた原作は大評判を呼び、権威あるウィットブレッド賞処女作賞、サマセット・モーム賞、ベティ・トラスク賞、それにウィニフレッド・ホルトビー・メモリアル賞を受賞したとのこと。

なぜスコットランド……？

フォーデンがなぜアミンを「スコットランドの黒い王様」と呼び、アミン自身がなぜ「スコットランドの最後の王」と自称したのか、私にはよくわからないが、映画の中に「スコットランドは、ウガンダ以外で1番好きな国」というアミンのセリフがあるから、それがヒント……？ ちなみに、当然ニコラスもスコットランド人であることに誇りを持っており、それはイギリス人の高等弁務官ストーン（サイモン・マクバーニー）に対して、「何を偉そうに……」と示す反感からも明らか……？ さらに、この映画を監督したケヴィン・マクドナルドという、すごく覚えやすい名前の監督もスコットランド人。

イギリスとスコットランドとの微妙な関係も私たち日本人にはよくわからないが、この映画ではとにかくスコットランドがキーワード……。

新政権の支持率は……？

2001年から5年半続いた小泉純一郎内閣は一貫して高い支持率をキープしたが、それはきわめて稀有な例。2006年9月の安倍晋三新政権発足時の内閣支持率は63.9%（産経新聞社とFNN〈フジニュースネットワーク〉との合同世論調査）だったが、そのわずか4カ月後の1月27、28日の調査では、それが39.1%に低下するとともに、不支持率が40.9%に高まっている（FNN世論調査）。ちなみに、田中角栄内閣の誕生は1972年。「今太閤」ともてはやされた彼の政権スタート時の支持率は熱狂的だったが、ロッキード事件によって失脚し、1974年に無念の退陣となった時はもうボロボロ……。

それと同じように（?）、1971年にイギリスの支援を受けてオボテ大統領に対するクーデターを成功させ、新大統領に就任したアミンの支持率はデータこそないものの、まさに熱狂的。アミンが国民に対してアピールしたのは、より豊かに、より自由に、より強くなろうというもの。

他方、1961年にアメリカ大統領に就任した第35代大統領ジョン・F・ケネディが「アメリカ合衆国の国民よ、国家があなたのために何をしてくれるのかではなく、あなた自身が国家に何ができるのかを問うてほしい」と演説したのと同じように、アミン大統領は国民に対して大統領への圧倒的支持を求めるとともに、経済改革や自由な選挙の実施などを国民に約束した。

演説は天才的にうまく、庶民的そして元ヘビー級のボクシングチャンピオンだったという恵まれた体格と愛敬のある顔立ちは、まさにカリスマ的大統領になる資質十分。その公約を着々と1つずつ進めていけば、歴史に残る名大統領となったはずなのだが……。

権力者にも悩みが……

ヒトラー、スターリン、毛沢東そして最近のロシアのプーチン（?）など、最高権力を握り政権の座にある者は、思うがままにその権力を行使する一方、いつか誰かにその座を奪われるのではないかという恐怖心を持っているもの。その点は、国民の圧倒的支持を受けて大統領に就任したアミンも同じ。アミンが倒した

旧政権はオボテ大統領だが、その勢力を根絶やしにできたわけではないから、残存勢力がいるのは当然。

2005年の9・11総選挙を「関ヶ原の戦い」とした郵政政局は、近年の日本政治最高のダイナミズムを見せたが、1970年代のウガンダでは、政局とはつまり軍事クーデターのこと。そして、クーデターに至る手前のテロや襲撃、暗殺などは日常茶飯事……？

したがって、アミンが国民に約束した、今風の言葉で言えば民主化、情報公開、透明化を進めようとすればするほど、敵対勢力に大切な情報が漏れることは必至。そんな中、大統領襲撃計画に1度でも遭遇すると、一体誰が大統領の動きに関する極秘情報を漏らしたのか、内部にスパイが入り込んでいるのでは、と疑心暗鬼になってくるのはむしろ当然。

そんな悩みが大きくなってくると、次第に側近ですら信用することができなくなり、次々と粛清の嵐が吹き荒れることに……。ちなみに、スクリーンの粛清政治は、歴史に残るすごいもの……。

若き医師の理想と現実は……？

スコットランドの医学校を卒業したばかりのニコラスが、本当に困っている人々のために役立ちたいという理想を持って、ウガンダのムガンボ村にある診療所で働く道を選んだのは、若者らしい気負いが感じられるものの、立派のひとこと。そんな姿勢は、医学を志す今ドキの日本の若者にも学んでほしいもの……。そんなニコラスとアミン大統領との出会い、ニコラスに対する大統領の主治医になってくれとの誘い、そして主治医になってからのニコラスの働きぶりやその中でますます深まってくるニコラスへの信頼の様子などは、あなたの目でじっくりと味わってもらいたいもの。

理想に燃える若き医師が挫折する原因は、一般的に金、権力そして女だろうが、この映画で面白いのはその女について……。

何とニコラスが手を出そうとした(?)のは、ムガンボ村で働いていた先輩医師の妻サラ・メリット(ジリアン・アンダーソン)だったからビックリ……。もっとも、彼女自身、ウガンダの診療所で医師として献身的な活動を続けている夫

を無条件に尊敬はしていても、女としての面は別……？　そういうテーマになると、現在大ヒット中の渡辺淳一の『愛の流刑地』（06年）の独壇場（？）だが、この映画はそんな2人の微妙な関係をスレスレのところでストップさせているのが心憎い……？

すなわち、ニコラスがムガンボ村の診療所での勤務を辞めて、アミン大統領の主治医になろうと決意したのは、サラとの危うい関係から逃れることも理由の1つ……？

一方で医師としての理想を持ちながらも、他方で現実に対応する能力を持つ、創造上の人物ニコラスは、アミン大統領の主治医という特権的立場に安住し、アミン大統領から往診に必要だろうという理由でプレゼントされたベンツのスポーツカーを単純に喜んでいたが……。

権力の内と外は……？

一般的に「灯台下暗し」という言葉はよく知られているが、それが権力に絡んでくると、「裸の王様」という言葉になる。すなわち、この言葉が端的に表現しているのは、権力の内側に入り込んでしまうと権力者の腐敗や誤りには気づかないものだということ……。

アミン大統領が「裸の王様」になっていく過程はきわめて興味深いのが、それと同様に面白いのが、若き主治医のニコラスも、自ら望む望まぬにかかわらず、徐々にそんな立場になっていくこと。

プレスシートには、アミン大統領による1971年の権力掌握以降の、敵対勢力の処刑や撲滅運動から、理由もないまま疑いをかけられた多くの人々に対する処刑そしてアジア人全員の追放命令、さらにはイギリス、アメリカと手を切り、リビアやソ連への依存度を高めていくアミン大統領の姿が、年表として整理されている。しかし、もちろん権力の内側にいるニコラスはそんな現実を知らされないまま……。

しかし、いつまでもそれを知らないままでいられるわけではない、アミン大統領のためを思って、大臣のワッサワが白人とホテルのバーで話し込んでいたことを不審な動きとして報告したことが思わぬ結果を招いたことに、ニコラスは大きな

ショックを……。そして、自らの真実の目でアミン大統領のやっていることを検証してみると……？

第2 夫人との不貞はヤバすぎるのでは……？

国民の圧倒的支持を受けて改革に邁進する大統領というイメージだったアミンが、時が経つにつれて独裁者・圧政者になっていることにやっと気づいたニコラスは、悩んだ末に「故郷のスコットランドに帰るので、主治医の職を辞任したい」と申し出た。しかしもはやこの時点では、そんな申し出を許すほどアミン大統領が寛容でなくなっていたのは当然だった……。

今やっとニコラスの目には、圧政者アミンの姿が見えてきたのだった。パスポートも没収されたニコラスは、切羽詰まった挙げ句、嫌っていたストーンに脱出の協力を依頼したが、今や「独裁者の白い犬」と評されているニコラスに対して、ストーンが救いの手を差し伸べることはなかった。

そんな絶望状態の中、はじめてアミン大統領に対して抱いたニコラスの恐怖を察したのは、何とアミン大統領の第2夫人のケイ・アミン（ケリー・ワシントン）。もっとも、それはちっとも不思議なことではなく、ある意味当然。

なぜなら、立場こそ異なるものの、ケイはアミン大統領に対してニコラスと全く同じ恐怖感を共有していたから。そこまでならいいのだが、問題はそんな恐怖心を酒に紛らせていたニコラスが、一時の激情に溺れてケイとの不貞行為に及んだこと。もちろん、これは同じ恐怖心を持ったケイも同意のうえの共犯（？）だが、そりゃマズいに決まっている。

しかも、ウガンダ国にアミン大統領の恐怖政治が続く中で始まったそんな2人の不貞行為によって、何とケイが妊娠したからさらに大変。これが日本なら秘かに堕ろすことも可能だろうが、ウガンダで大統領の第2夫人が極秘に堕ろすことなど到底不可能……？

そんなスリリングな状況をつくり出したことについて、ニコラスは決して申し開きはできないはず……。

ちなみに、プレスシートの年表によれば、1974年には「ケイ・アミンの手足を切断された死体が、彼女の恋人であるウガンダ人医師の車のトランクから発見さ

れる。医師は、毒薬を飲んでいた。このおどろおどろしい事件の完全な原因解明は、1度もなされたことがない」とのこと……。

いくら創造上の人物とはいえ、ニコラスと第2夫人ケイとの不貞、そして妊娠騒動はちょっとヤバすぎ。

ちなみに、渡辺淳一の『愛ルケ』はたとえ人を殺しても個人的な問題だが、ウガンダの独裁者の第2夫人の不貞・妊娠騒動となると、そうはいかないのは当然だから……。

絶体絶命の危機だが……

この映画の前半もダイナミックな動きがいっぱいで面白いが、後半、とりわけあれほど魅力的だったアミン大統領の圧政者としての血なまぐさい姿が露骨になり、ウガンダからの脱出すらできなくなったニコラスの苦悩と危機という局面になってくると、スリリングな緊張感がいっぱいになってくる。ニコラスの苦悩の第一歩は第2夫人との不貞、スコットランドへの帰国の拒否だったが、脱出協力を拒否したストーンという言葉によれば、ウガンダの危機は今や最悪の状態であり、その解決のためにはアミン大統領の暗殺しかない、らしい……。

たしかに大統領のすぐ近くに仕える主治医という立場なら、1本の注射で、あるいは1粒の錠剤でそれは可能……？ 妊娠したケイが極秘に墮ろすことができなければ、その父親が誰かについて明らかになってくるのも時間の問題。そして、そうなれば……？

映画終盤に至ると、不安を誘う音楽の効果もあり、そのスリルとサスペンスはさらに高揚してくることに……。

記者会見とハイジャック事件の勃発！

そんな最悪の状態にあるアミン大統領の起死回生の一手は、「開かれたウガンダ」を演出するための外国人記者向けの会見の実施だった。これは、ニコラスの自己保身を兼ねた(?) 提案によるものだが、さすが弁舌さわやかなアミン大統領。どこに経済危機があるのか？ どこに虐殺があるのか？ どこに外国人の抑圧があるのか？ それらはすべて反対勢力がつくり出している妄想だ、と巧みに

反撃。まさに「ウソも方便」もいいところだが、果たしてこれによってどこまで真実を覆い隠すことができるのだろうか……？

この記者会見が開かれたのは1976年。つまり1971年のアミン政権発足から5年後のことだ。

そんな中、突然イスラエル人とユダヤ人で満席のパリに向かうエア・フランス機が、パレスチナ人のテロリストによってハイジャックされ、ウガンダのエンテベ空港に着陸するという大事件が勃発した！ これははっきりとした歴史上の事実らしい。そこで映画は、一方でニコラスによるアミン大統領の暗殺計画とウガンダからの脱出計画を描き、他方でこのハイジャック事件に対するアミン大統領の人質解放に向けた対応を描いていく。すると、その2つの線が結びつくのはどんな形になるのだろうか……？ それがこの映画終盤のハイライトだ。

前半あれほどすばらしい大統領に見えたアミンが、5年の間にいかに変容した

恐怖政治の教訓 勉強しよう

安倍内閣の支持率の下落が止まらない。そんな中、2月24日に封切られた『ルワンダの涙』に続いて、アフリカのルワンダのすぐ北東にあるウガンダのアミン大統領の栄光と恐怖を描いた『ラストキング・オブ・スコットランド』が10日、公開される。

時は1971年。イギリスの支援を受けたオボテ大統領に対するクーデターを成功させたアミン大統領の支持率は、61年のケネディ大統領、72年の田中角栄、01年の小泉純一郎の両首相に勝るとも劣らない熱狂的なもの。それは、「より豊かに、より自由に、より強くなるぞ」という力強い演説と各映画祭の主演男優賞を絵ナメにし、予想通り第79回アカデミー賞の主演男優賞を獲得した黒人俳優フォレスト・ウィテカーのデカい体格と変きようのある顔立ち、そして、その卓抜した演技力によるもの。しかし、権力者の内心は？

ヒトラー、スターリン、毛沢東など最高権力を独占した者は、必然的に権力の座に固執するとともに、いつかその座を追われるのではないかとこの恐怖を内心に抱えているもの。



したがって、アミン大統領が公約した、今風に言えば民主化・情報公開・透明化の推進は、敵対勢力にも重要な情報を提供するため、大統領暗殺さえ可能にするもろ刃の剣……。

日本人にはなじみの薄いそんな大統領をつぶさに観察したのは、スコットランドから希望に燃えてウガンダの診療

所に赴き、ヒョンなきっかけで大統領の主治医兼側近となった若き医師。

理想的な政治実現のための反対勢力の排除が、いつしか徹底的な弾圧と恐怖政治に移行したことを思い知らされたとき、既に彼には帰国の道さえ閉ざされていた。そんな中、大統領の毒殺さえ可能な主治医という立場にあった彼はいかなる決断を？

圧倒的な国民の支持で大統領に迎えられた権力者の腐敗と変貌（へんぼう）ぶりを、これほどダイナミックに描いた映画は見ごたえ十分で超お薦め。わが国では内輪から「裸の王様」という声さえ出されている今、支持率の急落を漠然と見逃しては安倍内閣の命取りになるかも……。

そんな日本の政治状況と対比しながら、是非アフリカの、そして70年代のアミン大統領の恐怖政治の教訓を勉強しよう！

（弁護士 坂和章平）

産経新聞2007（平成19）年3月2日

のか？ それをすぐ近くで見守ってきたニコラスは、どんな運命を辿るのか……？ それは、あなたの目で直接確認してもらいたいものだ。少なくとも、この映画を観る2時間5分は決してムダな時間ではないことだけは、私が保証しておこう……。

アカデミー賞でも、主演男優賞は決まり……？

この映画でアミン大統領を演じたフォレスト・ウィテカーの演技力は、とにかくすごいとしか言いようがない。大統領就任直後の演説は感動的だし、外国人を集めたパーティーでのウィットに富んだスピーチも最高。そして、ニコラスとの最初の出会いだけで、ニコラスの人柄と能力を見抜き、主治医に抜擢した人間鑑識眼のたしかさにも脱帽……。

しかし最高に面白いのは、最高権力を握った後のアミン大統領の心の動揺だ。パーティーの後、体に変調を感じたアミン大統領が毒を盛られたと錯覚して死の恐怖を叫んだり、オボテ派の襲撃を受けた後には、「身内に裏切り者がいる」と激怒したりといった具合で、アミン大統領の心の動揺は広がっていった。

最初は、表の顔と裏の顔が一致していることで人気を得ていたアミン大統領だったが、敵対勢力を恐れる中、アミン大統領の表の顔と裏の顔の乖離は次第に増大していくばかり……。そんな孤独な最高権力者の不安定な心の動きを、フォレスト・ウィテカーは実に見事に演じている。

私の予想では、来る2月25日（日本時間26日）に発表されるアカデミー賞で、彼が主演男優賞を受賞するのはほぼ確実……？

ちなみに、2005年の9・11郵政総選挙に踏み切った、小泉純一郎総理の心境はどのようなものだったのだろうか……？ 飯島勲氏の『小泉官邸秘録』を読めばその一端を感じることができるが、アミン大統領の心境を推し量ることは、到底不可能……？

2007(平成19)年1月31日記